

春の章

一

あはははははははははははははははははは。

腐れ爛れた嗤い声が耳を衝く。

文から顔を上げた雫は、己が目を疑った。

美しかった姫の容貌は、最早欠片も残っていない。黒眼と白眼が入り混じり斑紋様になった眸、裂けた口、迫り出した牙、蛇の如く乱れた髪からは、拗れた双角が突き出している。両の手は筋張り血管が浮き出で、骨のように鋭利な爪が震えながら生えており、身に纏う端麗な着物と、あまりに不釣り合いであった。

町の炎を背にして、本性を顕わにした妖しき姫は——。

ゆらりゆらりと左右に揺れながら、雫に云った。

「御剣。そなたまだ気づいておらんだのか」

愚か愚か、と、実に愉快げに嗤っている。

文をその場に取り落とした雫は、逃げることも忘れ、ただ茫然としていた。

「一体……いつから」

「初めからじゃ。町でそなたに助けられたとき、否、屋敷を抜け出したときには既に、この躰じゃ」

「邪鬼の……魅、が、取憑いて」

「左様。今の人間は我をそう呼ぶ。怪力乱神悪鬼羅刹、悪しき御霊妖しき魅、如何に呼ぼうと同じこと。鬼じゃ。邪しき鬼じゃ。怖ろしい畏ろしい、凝り凝った禍禍しき神じゃ」

何処を見ているか知れぬ眼で、姫は雫を凝視している。妖物は時折意味もなく、四肢を蠢かした。収まりきらぬ何物かが、中で身を震わせているかのようであった。

「何時気づくか何時気づくかと思うておったが、結局最後まで気づかないだか」

「御剣様、支度が調い——」

その時桜が、岬をつれて戻ってきた。そして雫の肩越しに部屋の中を覗き込んで、絶句する。傍らに立つ岬は、幼子らしからぬ表情で、眉間に硬く皺を寄せていた。

「ちよつとあんたたち。まだこんなところにいたのかい。さっさと逃げないところのままじゃうちの宿も——」

続けて、廊下で固まっている雫たちを見咎めた巴も、此方へ来るなり顔を歪ませ口を噤む。

そして、にやりと皮肉に笑った。

「——姫様。暫く見ないうちに随分お変わりで」

「巴。そなたにも世話になったのう。礼を申すぞ」

妖怪の姫君は片手を差しおぼし、虚ろに謝辞を述べた。

雫は次第に、怒りを感じ始める。

「じゃあ……お城の人たちが姫を狙っていたのも」

「当然のこと。我がこの姫に憑いて町の外から妖怪を呼び込み、屋敷を我が物にしようとしたからじゃ。あの時は我も未だ力満ちず、侍どもに追われて逃げるしかなかったが、ここへ来て存分に靈気を蓄えることが出来た」

——全部、逆だったんだ。

今になって漸く、雫は全てが判った。

取憑かれた城の者たちが姫を追っていたのではなく。

取憑かれた姫を、城の者たちが追っていたのである。

將軍からの戦への指示が減ったのも、妖怪に憑かれたからではない。戦以上に速やかに倒すべきものを見つけたから、戦どころではなくなったのである。

桜が城から渡されたままに貼ったあの文も、姫を城に渡さねば江戸が妖怪に襲われる、と云っていた。あれは脅し文句ではない、文字通り、姫自体が危険だと云うことだったのだ。

「この江戸を手中に収めるため彼の屋敷を本陣とするつもりじゃったが、ちと遣りすぎて城の者共に気取られた。何とか逃げ切り身を隠す場所を探すうち、ここまで来た。あのちんぴらにもあわよくば取憑いて利用してやるかとも思っておったが、そなたが助けてくれるというから、むしろそれを隠れ蓑にした方がよいかと思うたのじゃ。己で逃げ回るより、匿うても

ろうた方が何かと好都合」

雫の脳裏に、これまで起きた様々な出来事が蘇る。

それぞれの意味が、全て逆に塗り替えられていく。

「あの夜、私と颯太が襲われたのも」

「無論我が呼び寄せた妖怪どもじゃ。我が来た途端に宿の周りに妖怪が増えたのじゃぞ。何故おかしいと思わなんだ」

小馬鹿にした調子で、浄瑠璃姫の身を借りた妖物は宣った。

「それじゃあ、あの大鴉やその遣いが、夜や明け方この辺りに来ていたのも……」

「夜になる毎、私の妖気が強まっておったからじゃろうな」

事も無げに姫は応える。

「あの鴉はこの江戸の町を大昔から護ってきたもの。何とか結界を張って私の妖気を押さえ込み、あの者に気づかれぬようにしておったのじゃが」

そう云って姫は、部屋の四隅に未だ置かれた、紙の雛人形を見遣った。雫は眼を円くする。

「それでも宿に妖怪を湧かせた日の翌朝と、それからこっそり宿の外に出てあの侍を殺した日、あの時は流石に気づかれて鴉が来てしもうた。まあそなたが、どれもこれも勘違いしてくれたおかげで助かったがの」

「結界って……」

「結界とはそもそも己が気を消して外敵に見つからぬようにするものじゃ。何も間違った使い道はしておらぬぞ」

姫は身を揺らす。また嗤っているようだったが、もうその歪み崩れた貌からは、感情を押し量ることなど出来なかった。

「兎に角そなたらが、あの鴉のことを妖怪の親玉と取り違えておったから、これを利用せぬ手はないと思うての。桜もそれらしいことを云うておったから、そなたらに鴉を退治させてしまえ、と考えた」

桜は最早蒼白であった。

「——それでは、私に御剣様の伴に参れと仰せになったのも」

「そなたが私の命を狙うておったからに決まっておろうが。気づかれておらぬとも思うたか。我を謀ろうなど百年早い」

ふらついてそのまま倒れそうになる桜を、雫は慌てて支えた。

そうして、きつ、と姫を睨み付ける。

「ははははは、恨め怨め憾め。その悪しき想いが私の血となり肉となる――そして兎も角も、雫らが鴉を打ち倒してくれた御陰で、江戸の町の護りは弱まった。我も腰を据えて、妖怪を呼び寄せることが出来た」

首をぐるりとねじ曲げて真後ろを振り返り、姫だった物は窓の外の燃えさかる町を見た。

「風邪を引いたとか言ってたのは……」

「なに、次第次第と私の妖気も、抑えが効かぬほどに高まっていったからの。その童はただの童にあらず、御前か化身か知らぬが、いずれにせよ私の気に勘づく虞があった。この部屋の結界の内に入られては敵わぬから、適当なことを云うておいただけじゃ。そなたらが此処に来ぬ間、ずっと妖怪を湧かせ、力を蓄えておいた」

岬は何も云わない。

「私の狙いはそもそもそれ、江戸の町を内側から食い破る事じゃ。鴉と社が張っておった結界の内に妖怪を湧き出づらせ、中から町を打ち壊す。斯くしてその願いは達せられ、これこの通り、我が江戸を手にするのも時間の問題じゃ」

姫の独白で、全てが一本に繋がった。

けれど。

――こんな解決、要らなかった。

そう思い、齒を食い縛った雫は、そっと腰の刀に手を遣る。

すかさず此方へ向き直った姫は、牙を剥きだした奇怪な形相で、ぎぢぎぢちぎぢちと嗤った。

「遅い。ここまで来て我に立ち向かおうなど――」

すると、着物の胸元から苦内を取り出した桜が、姫に向けて駆け出した。

「桜ちゃん！」

「お命、頂戴ッ」

しかし――。

その瞬間、部屋の四隅の雛人形が桜の前に飛んでくると、びしびしと真つ黒な血肉塊を膿の如くに嘔き出して――。

忽ち身の丈七尺を越す、巨大な鬼の姿になった。

「なッ」

驚いた桜が避ける間もなく、その黒鬼は腕を振り上げる。

「ぐっ」

化物の怪力で思い切り殴られた桜は、雫の横の襖に勢いよく叩き付けられ、そのまま襖ごと廊下の壁にぶつかると、動かなくなつた。

「——弱き人間には叶わぬことよ」

「……桜ちゃん！」

「う——」

腹を押さえ、桜は小さな声で呻いている。急ぎ駆け寄り、その背を支えて起こしてやつた雫は、再び邪なる者を見返す。浄瑠璃姫と鬼どもに向かつて、腹の底から叫んだ。

「……貴様ア！」

「おう、怒つたか——泣け、喚け、詰れ。その想いこそが我そのもの。我は邪鬼なり。我こそは魔境なり。我は怪奇に非ず。我は怨敵に非ず。万人遍く我をその内に抱え、それ故見慣れ、気づかぬものなり。凝り募つて邪を為すまで、己が内を疑うことも知らぬ愚かなる者共よ——汝我なり、我汝なり」

四頭の黒き羅刹に囲まれ、髪を振り乱した鬼姫は、狂おしく嗤う。

唐突にそのむくつけき黒鬼たちは、物云わぬまま後ろを向くと、徐ろに壁を力任せに殴り蹴り、外まで抜ける大穴を開け始めた。巴が止めに行こうとするのを、雫は必死で押しとどめる。

「ちよつと、何すんだよッ」

「ここまで来ればこの宿にも用はない。我はこれから、数多の魍魎魍魎と共に江戸の全てを手中にする。大儀であつたな。そなたらの御陰で、事を進めることが出来た。改めて礼を云うぞ」

そうして壁に空いた大穴からは、今生の地獄と化した江戸が見えた。

空で未だ焰を舞い散らす妖怪、火の海になつた町、通りを行く異形の者共。そして、鬼面の武者に追い立てられて泣き叫ぶ人人が見えた。

ごう、という大きな音を立て、向かいの屋敷が崩れ落ちる。

全てが、失われようとしていた。

雫は歯を食い縛る。

そして無言のまま——刀を抜いた。
ずしりと、その手に叢雲の重み加わる。

——このまま終わらせて堪るか。

「ほう、此の期に及んでまだ一戦交えると申すか、御剣。難儀なことよ
う——」

腐れた眼を細め、姫は詰まらなそうに云う。

「しかしお主。気を張っても判るぞ——まだ、迷いがあるな」

その言葉に動じて、雫は思わず刀を握り直した。

「迷いなど……」

「透けて見えるわ。そなたには初めからそれがあつた。江戸を見て回る時
も、桜の話聞く時も、鴉を退治に行く時も、どこか醒めておつた。斯様
なことをして一体何になる。人を救うて何になる。江戸を護つて何になる。
そう思つておるのじゃろう。ええ。一步引いて、恰も虚言でも眺むるかの
如き眼差しで、己が振舞を定め、世の万事を嘗めてかかつておつたな」

雫は息を呑んだ。

心中を覚さられていた。

——そうだ。

——自分は、迷つていたのだ。

これは絵巻の中のこと。

現実に非ず、ただの作り事の物語。

ならばどうすべきか、何を為すべきか、何が正しい答なのか。

どうすればちゃんと、お話が終わるのか。

そんなことばかり、考えていた。

甘えたことばかり、思つていた。

「未だ斬りかからぬがその証。迷いがあるから動きが鈍る。惑いがあるか
ら想いが弱まる。世捨人でも気取つたか。達観とくわんでもした気か。計算そろばん尽くで
動こうなど百年早いわ。そのような浮ツついた未熟者に我が斬れるか。さ
あ、それでもまだ——剣を向けるか」

雫は刀を下ろさない。否、下ろせない。

動けない。

どうすればよいのか。

何が出来るのか。

——判らない。

だが、その時である。

「おい——」

雫の背後から声を掛けたのは、

颯太だった。

二

ひょいと顔を覗かせた颯太は、尋ねた。

「——今物凄い音がしたぞ。何かあったのか」

「颯太！ 来るな！」

しかし、手遅れであった。

「丁度良い、この者を貰うていこう」

云うなり姫の艶めかしい黒髪が、蜘蛛の脚のようにずるずるずるずると畳に沿って、不気味に此方こちらへ向かって這い伝い伸びる。

そして、颯太の左足首へ、蔦の如くに固くぎちりと巻き付いた。

「えっ——」

抗う間もなくその場に倒された颯太は、そのまま畳の上を引きずられ、仕舞いに鬼姫の脇へ、あっけなく転がされる。

「颯太！」

「人質じゃ。この姫の躰もそろそろガタが来る。その後は——この者の躰を借りるとするか」

んん、何か云いたいことはあるか東雲、と姫は虚ろに空いた穴のような眼で、颯太の顔を覗き込む。いきなりのことには何が起きたか判らぬ様子だった颯太も、これで全てを解したらしく、愕然とした。そうして颯太は、雫の方をちらりと見遣る。

雫は、まだ動けない。

ところが。

突然何を思ったか、颯太は両の手で這うようにして、ずりずりと後ろへ

下がっていった。そして壁際に至り、黒鬼たちの陰になってすっかり隠れてしまった。

何故なのか判らず、雫は困惑する。

「何じゃ、何をしておる。情けない己が姿、恥ずかしゅうて見られとうないか。よいよい。今の内が華じゃ」

口振りだけ寛容にして、姫はほくそ笑んだ。

ここへ来て何とか身を起こした桜が、咳き込みながらも姫に向かって云った。

「このまま、逃げられると思うのかッ」

「笑止。外は火の海。人の脚でどうやって抜けるというのじゃ。精精江戸から抜け出すが関の山、私の後など追えるはずもない」

軋むような声を上げて、姫は哄笑した。くっ、と桜が口惜しげに洩らす。万事休すか、と雫は身を震わせた。

しかしふと——雫は気づいた。

陰に隠れた颯太が、壁に向かって何かをしている。

あれは——。

「さあ、そろそろ時間じゃ」

姫は、背後の大穴を振り返る。それに合わせたように、遠方で火焰を撒き散らしていた獣の妖怪——颯太が火車と呼んでいたものが、此方へ向かって真っ直ぐ宙を飛んで来た。軀を波打たせ、中空を泳いでいる。そして、穴のすぐ前に止まった。

黒鬼三頭に担がれた姫は、その背に悠悠と乗った。颯太も、残りの一頭に着物の背を掴まれて、抗うことも出来ず連れて行かれる。

そこで漸よちよう呪縛よちよでも解かれたかのように、雫は穴へと走り寄った。

「雫ッ」

鬼に捕らえられたまま、火車の背中中で最後にそう叫んだ颯太は、不意に雫に向かつて、何かを投げつけた。

飛んできたのは何故か——颯太が何時も使っている、筆だった。

墨がついたままの筆は、畳にぶつかり線を描いて、ころころと転がった。

「颯太！」

「——さらばじゃ、愚かなる剣客よ」

しかしそんな雫を嘲笑うと、浄瑠璃姫はそう云い残し。
火車はごう、と火の粉を上げ――。

二人を乗せて、空の彼方の何処かへと、飛び去っていった。
雫は穴の傍で、力なく膝をついた。

「そんな……」

今すぐ追わねば。

直ちに行かねば。

見失ったが最後、颯太は手遅れになる。

妖怪に取込まれる。

けれど、見渡す限り町は轟轟たる炎で満ちていて――。

追いかける前に、焼け死ぬのが落ちだった。

「こんなのって……」

万策尽きたとしか、思えなかった。

そして、颯太の投げた筆を、そつと雫は拾い上げる。竹林で最初に出逢った時、それはまだほんの数日前なのに、もう随分以前のことに見える。

あの時、持っていた筆だった。

雫は、それを握った。

けれど――何も起こらなかった。

何処かで誰かが物語っていたような、甘く優しい、二人を救ってくれる奇跡は、そこにはなかった。何時まで経ってもどれだけ待っても、それはそのままだった。

当たり前だけれど。

何もしなければ、何も起きない。

――涙でも、流せばいいのかな。

自分でも馬鹿げたことだと思いつながら、雫は考える。

けれど涙は、出なかった。

ぼうとしながら、雫はただその筆を、何時までも見つめていた。

――これで、終わるのかな。

そう、思った。

しかし、その時だった。

「――御剣様っ、あれをッ」

離れたところから雫を見つめていた桜が、唐突に大きな声を出した。びくり、と背を震わせ、雫は振り返る。

桜は、颯太が最後に向かっていた、壁を指さしていた。

そこには――。

――目を見張るほどに美しい、駿馬の絵があった。

雫は言葉を失った。

颯太は鬼の陰に隠れて、渾身の筆を振るっていたのだ。壁一杯に描かれたその見事な馬は、荒く力強く猛猛しく、風の如く軽やかに、水の如く涼やかに、駆け抜ける姿をしている。靡く鬣たてがみ、嘶く口、筋骨隆隆として毛並みのよい躰、地を踏みしめる脚は、しっかと立って麗しい。

そして何よりも。

澄んだ優しい瞳をしていた。

――颯太の眼だ。

「……描けるじゃない」

その眼と見つめ合いながら、雫は此処にいない颯太に向かって、そっと言葉を洩らす。

けれど不思議だった。颯太が描いたのに、馬はまだ絵の中にいるままである。

淨瑠璃姫は颯太が力を遣うところを見たことがなかったから、恐らくは絵を描いていることには気づいていても、何も咎めなかったのだろう。それはよいのだが。

何故出てこないのか――。

雫は暫く馬を眺めて思索し、そして漸く、気がついた。

馬にはまだ、尾がなかったのだ。

雫はくすり、と笑う。

「……はいはい」

握った筆を壁に押し当てると、さっと流すようにして、

雫は最後の一笔を入れた。

刹那。

目が眩むほどの光を放つと。

壁から葦毛の大きな馬が飛び出した。

命を吹き込まれた堂堂たる体躯の若馬は、畳敷きの部屋へ身軽に降り立つと身を震わせ、声高らかに嘶いた。

雫はにっ、と笑った。

「……よし！」

三

斯くして――。

馬に乗った雫は、炎に包まれた江戸の町を疾走した。

家家が上げる炎で、頬が焼け焦げそうなほどに熱い。溶けた雪が蒸発していることもあるのか、靄が立ち籠め視界は揺らぎ、辺りはまさしく、この世の終わりのような様相を呈していた。

鬣にしっかりと掴まりながら、雫は空を見上げる。

何も無い中空を跳ねるように、火車が真っ直ぐ何処かへと向かっていた。

夜の空を、妖物は真昼のように照らし出している。

――あの上に、颯太がいるのだ。

一つ結びにした自分の髪を靡かせながら、雫は宿での最後の話し合いを思い出した。

「――うちの宿はね、生憎ちよつとやそつとのことじゃ燃えないよ」

にやりと不敵な笑みを浮かべると、巴は胸を張った。

「何せあたしがあれやこれやの実験で、毎日小火出してるようなもんだからね。そんじよそこらの家とは訳が違う。策を練って態勢立て直したら、あたしたちも何とか後追いかけて行くから。お侍さんは先に行きなッ」

岬の傍らで、桜も云う。

「岬様も鳥を使って追いかければ、と仰せなのですが」

その言葉を受けて、岬はぼつりと呟いた。

「——危ない」

桜がすぐさま補足する。

「あの妖怪の後を空を飛んで追っては、忽ち気づかれて襲われてしまします。心苦しいですが、やはり御剣様に馬で追っていただくしかないようです——と仰せです」

「桜ちゃん、いつの間に岬くんの通訳に……」

馬上から雫は苦笑した。大鴉を襲わせてしまった責任も感じてか、同じ部屋で寝泊まりして岬の世話をしている間に、桜は無口な子供とも意思疎通が図れるようになったらしい。幼子に対して様付けの低姿勢で接しているその姿は、こんな状況であつてもやはり愛らしかった。

「これを」

岬はまたぼつ、と云うと、袖の中から小さな鈴を取りだした。手を伸ばす雫に、童はしっかりと両の手で握らせる。桜は、連中の行き先に辿り着いたらお鳴らしくださいとのことです、と云った。

巴がおほん、と咳払いをする。

「まあ、ともかく。細細したことはこっちに任せて。お侍——いや、雫は、行つておいで。颯太の処へ」

煤を頬に付けた巴は、そう云って魅力的に微笑んだ。今更ながら、もしかしてこの女は全^{ひと}てお見通しだったのかも知れない、と気づいて、雫は恐縮した。

而して雫は、妖怪の開けた大穴から、炎の上る表通りへと、馬に乗つて出立したのであつた。

いきなり、少し先の家から、火のついた柱が通りへ向けて倒れ込んでくる。くつ、と息を洩らして雫は馬の鬣を引き、跳び上がらせた。馬は何の苦もなくしなやかに柱を越えて、そのまま走り続ける。

かんかん、と半鐘の音だけは何時までも頻りに聞こえるが——。

肝心の火消しが現れる気配は、一向になかった。

まるで、厭な夢のようだった。

けれど。

「お父ちゃあん、お母ちゃあん」

何処からか、子供の泣き声が聞こえた。

女の悲痛な叫び声が響き渡る。すぐ其処には、男が事切れた様子で倒れている。雫の胸が、きつく掴まれたように痛む。

ほんの数日前この世界に降り立ち、颯太に連れ廻されてこの町を見て歩いた。雑然としながらも賑やかで、暖かで、憧れと懐かしさを感じずにはいられない町並み。簡素で剛胆で美しい文物。生氣と活気に充ち満ちた町人たち。そして、幼気な愛らしい子供たち。

それらが今、失われつつある。

譬え全てが夢幻だとしても。

——この胸の痛みは、紛う事なき本物だ。

雫はそう思った。

ごうごう、ぱちぱちと周囲の全てが燃え上がり暗い煙を立ち上らせる中、家の陰からぬつ、と巨大な何物かが姿を現した。

醜悪な態をした、見越入道であった。

驚いた馬が後足立ちになり、雫は危うく振り落とされそうになる。

「どう、どう！」

馬を懸命に宥めながら、雫はその背の上で刀を抜く。揺らめく火の光を反射して、叢雲は目映く輝いた。入道は雫に気づくや、胡乱で邪悪な笑いを口元に浮かべ、諸手を上げて襲いかかってくる。

雫は深く息を吐き、心を落着かせた。

逃げも避けもせず、雫は馬を巧みに操り正面から突っ込む。

そうして——真っ直ぐに刀を振り下ろした。

「ぐおおっ」

首から胸にかけて袈裟懸けに斬られた入道は、重い唸り声を上げ、地響きを立てて倒れた。一滴も血は出なかった。そしてそのまま見ていると、不可思議なことにゆらりと煙のようなものを上げ、入道の躰は消えてしまった。後には、何一つ残らなかった。

何が起きたか判らず雫は暫くその跡を見つめていたが、そうしてばかりもいられない。空を見上げると、すぐに馬を駆って、火車の後を再び追

始めた。

——あの煙のようなものが、邪鬼の魅だろうか。

雫は思う。ということは、やはり雑魚の類をいくら倒したところで意味はないのであろう。悪しき魅はその場に消え失せるのか、あのまま他所へ移るのか。判らないが、兎に角さしたる手応えはなかった。しかしいずれにせよ、叢雲が妖怪退治に存分に効くと云うことが判っただけでも、よしとするべきなのであろう。

抜いたままの刀を右手に握ったまま、雫は馬を急がせる。

上空の火車の速度が上がった気がして、僅かに焦った。
すると。

「——覚悟」

不意に低い声が出たかと思うと、右脇の角から馬に乗って、鬼面の武者が飛び出してきた。

走りながら、鞍上から雫へ鋭く斬りつけてくる。

「くっ！」

咄嗟に雫は、叢雲でその刀を受ける。甲高い音と共に火花が散った。

武者は凄まじい力でごりごりと押してくる。この勢いで走る馬から地面へ落ちれば、即ち終わりである。雫は馬の首筋にしがみつくようにして、必死に刀を返す。どちらも一向に引こうとしない。二頭の馬は並んだまま、江戸の通りを直走^{ひたはし}った。

さしもの雫も、妖物の怪力にはそうそう敵わない。懸命に丁丁発止の斬り合いを続けるが、こんな不安定な状態で如何にして戦うかなど教えられたこともなく、一方無表情な面を付けた武者は、苦しむ様子もないまま、容赦無しに斬りつけてくる。

(拙い……)

余裕が無くなり、雫が顔を顰めたときだった。

前方に、武家屋敷の方へ通じる木橋が見えた。

当然のように焔^{ほのお}を上げている。

——一か八かだ。

雫は馬の速度を上げると、武者より先に橋へ駆け込んだ。蹄が木を叩いて、高い音を立てる。案の定炎の所為で板は付け根からぐらついて、今に

も崩れそうだった。下は深い川である。

橋から最後の一步を踏み出すとき、雫は思い切り鬣を引いた。

馬は力一杯跳ねる。

雫の馬が後足で蹴ったのを最後に――。

堪えきれなくなった橋は、がらがらと崩れていった。

雫の後に続いて走っていた武者と馬は、それと共に無言のまま、川へと転落していった。

大きな水音を背にして、雫はただただ、走り続けた。

四

遂に火車が、空中でぴたりと止まった。そのまま、ゆらゆらと降り下っていく。雫は馬上から、その先をしかと見定めた。

魔物は広大な武家屋敷の一つの中へと降りていった。

――成程。

恐らく、あれが浄瑠璃姫の元いた屋敷なのであろう。妖怪を既に引き込んでいる場所を根城にして、邪鬼は更なる力を得るつもりのようなだった。

雫はその屋敷へ向け、再び馬を走らせる。

改めて周囲を見廻してみれば、初めからその公算だったのであろう、その屋敷の周囲や他の屋敷にも、殆ど火はついていなかった。加えて、大きな屋敷が続く割に、いやに人影がない。城の方がお触れでも出して、危険な妖怪屋敷の周りから人を払ったのかも知れなかった。

走り続けた雫はどうとう、敵の本陣の前まで辿り着いた。

しかし、此処へ来て困ってしまった。屋敷の正面の大きな扉はぴたりと閉ざされ、到底入れるようには見えない。妖怪で内が満たされている以上それも当然で、確か桜でさえも、中に入れなかったと話していた。

雫も馬から下りて、それを近場に繋ぐと、試みにその厚い木の扉を力任せに蹴ってみる。が、足が痺れんばかりに痛むだけで、びくともしなかった。門前から見えるのは、中に生えているらしい立派な桜の木の枝が、高い扉越しに飛び出している様子だけだった。

枝にはぶつくりと、桃色の綺麗な蕾が幾つも幾つも付いていた。この熱

さで、成熟が早まっているのかも知れない。

いや、そんなことより。

(どうしようか……)

塀は高く、乗り越えられそうもない。雫は腕を組んで考え込んでしまう。すると、ふと思いついた。

袖の内からさつき渡された、根付ねつけの付いた鈴を取り出す。

(鳴らせ、とか言ってたな……)

首を傾げながら、雫は数度鈴を振った。

りん、りん。

爽やかな音色が響いた。

暫し、時間が経つ。

しかしこれと云って、何も起こらない。

口をへの字に曲げて、雫は鈴を見直した。

(なんだこれ……?)

だが、その時である。

ばさばさという羽音と共に、足下に暗い影が出来る。

雫は眉間に皺を寄せると、空を見上げた。

「——あああああああああ、到着ッ」

剛毅で鱧背いみなせな女の声が聞こえるやいなや。

空から数羽の恐ろしく大きな鳥の群が、勢いよく舞い降りてきた。

「ええええええ！」

仰天した雫は、腰を抜かして座り込む。無論それらに乗ってやって来たのは、巴、桜、岬の三人であった。鳥のうちの一羽は、足に何か長持のよな箱を掴んでいる。

「いやあよかったよかった。行き先、突き止められたみたいだね」

軽い調子で巴は云うと、ひよいと鳥の背から降りた。炎の熱さに頬を染めた色っぽい巴は、今は着物を襷掛けにして動きやすい格好をしている。

半ば呆れて雫は云った。

「こんなあつさり来られるなら……」

「いやだから、火車の後を直接追っていたら忽ち火でも噴かれてみんな墜落してたよ。こうするしか手はなかった。雫の御陰だ。有難うね」

この状況でも、にっこり巴は笑ってみせた。流石この歳で旅籠を取り仕切る女将だけのことはある、と雫は感嘆する。

続いて岬、桜も降りた。岬は雫の顔を見るなり、ぱたぱたと駆け寄って来て、雫の焼け焦げた着物の裾を掴む。態に似合わぬ相変わらずの鉄面皮であるが、これでも心配してくれていたらしい。

そして桜は——暗い色の忍装束しのぶに身を包んでいた。

「桜ちゃん！」

「少少お恥ずかしゅう御座いますが——やはりこれでなければ」

雫に見られてもじもじとしながらも、桜はそう云った。ぴったりとした無駄のない服装が、桜にはよく合っていた。

「さ、て、と。今はどうした具合かな」

巴は長持の上に色気無くどつかと腰を下ろすと、雫に問うた。雫は事の次第を掻い摘んで説明する。桜は雫の傍で静かに片膝をついており、岬は三羽の鳥のうち二羽に命じて、何処かへ帰らせていた。

一通りを聞くと、巴はうん、と頷いた。そして岬に云う。

「それじゃあちよつと見てきてもらえるかな」

淡淡と岬は首肯すると、残った一羽の鳥の背中に再度跳び乗り、すぐさま深夜の夜空へと飛び立っていった。

「取り敢えず中がどうなってるかを確かめないとね。それと、この扉を開けないと。こういうこともあるかと思って、持って参りましたよ」

巴は長持から立つと、縛ってあった紐を解いて蓋を開く。

中に入っていたのは——。

「前話したろ。あたしが趣味で作った、大火筒」

——大木の一本や二本へし折りそうな、両手で抱える大砲おおづであった。

啞然とする雫を尻目に、よいしょと云いながら当たり前のように巴は火筒を組み立てていく。

「何かあったときにとまって用意しておいたんだけど、備えあれば憂いなしだ。漸く使う機会に恵まれた。思う存分ぶっ放してやる」

組み立てながら眼を爛爛と輝かせ、鼻息荒く巴は云った。何かあったときとは何を想定していたのか。雫は火の海を通り抜けたばかりなのに寒気がする。念のために巴に云った。

「あの巴さん、程程に……」

「此の期に及んで何云ってるんだい。程程っていうのはね、無能な奴の渡世術。真実己が望みを叶えんとするならば、そんな甘つちよろいことは云ってられないはずだよ。人目なんか気にせず何もかもぶっ壊せ、だ——さあ出来た」

饒舌に喋りながらも巴は火筒を完成させた。想像以上に立派な鋳物細工であり、趣味で作る域を優に超えている。威力も並並ならぬことが窺えた。

「竜虎三式改。前撃ったときはうちの小屋は吹き飛ばは奉行所から呼び出しを喰らうわで大変だったけど、今回は遠慮は要らない。乱れ撃ちだ。うふふふふふ」

砲身を嬉しそうに撫でながら怪しく笑う巴がそう云い終わると同時に、空から岬の乗った大鳥が、偵察を終えてゆつたりと降りてきた。

鳥の背から岬は云う。

「妖怪いっばい」

「おやおや」

肩を竦めて巴は呟く。

「策も何もなさそうだけど——桜は何か云いたいことはあるかい」

わ、私で御座いますか、と小さくなって控えていた桜は慌てる。

「ええと——兎も角、御剣様は東雲様を真っ先にお探しになられた方が、よろしいのではないかと」

「そうだね。残りの雑魚はあたしたちが引き受けるよ。何処まで出来るかは判らないけどね」

「でも……妖怪を倒すならこの刀の方が」

叢雲に手をやり、雫は心配そうに云う。これを使えば即座に妖物を消し去ることが出来る。しかし巴は笑って手を振った。

「大丈夫大丈夫。それに、あたしらには此奴もいるしね」

桜、と巴が声を掛けると、くのいちの少女は素早く、装束の胸の内から和紙を一枚取り出した。そしてぱん、と乾いた音を立てて、その紙を広げる。

紙の中から巨軀を振らせ、ぬうと飛び出してきたのは——。

「毛虎！」

雫はそう云うなり、駆け寄って飛びついた。黄色い毛の塊のようなその大きな動物は身を震わせ、ぐうと喉を鳴らして人懐こそうに喜んだ。やはり猫のようである。

腕組みしてそんな様子を眺めながら、巴は感嘆する。

「いやあ、本当に颯太の力は不思議だねえ——随分画風がその、その馬と比べて独特だけど」

確かに二頭並べてしまうと何とも云いがたい気持ちになる。加えて巴は、興味深げに呟いた。

「——一体、どういう力なんだろうねえ」

桜は紙を筒に丸めて胸元に戻しながら、雫に向かって伝える。

「この仔に乗ってこようかとも思ったのですが、それではその——」

「……燃えちゃうよね」

ふさふさとした毛虎の躰を撫でながら、雫は笑みを零した。しかし、そうしながらも巴の言葉が耳に残る。

——一体、どういう力なんだろう。

「さて雫よ。準備は万端整った。何時でもどうぞ」

腰に手を当て、巴は颯爽と云い放つ。万感胸にこみ上げてきて、雫はその手を取ると、感謝の念を伝えようとする。

「あの巴さん、私その、あの……」

「ああもう、ハイハイ判った。全く真面目なんだからこの娘は。そんな熱い眼差し向けてくると、あたしも変な気を起こすよ。やめとくれッ」

手を無理矢理離すと、苦笑した巴は雫の背中をバンバンと叩く。これでも照れ隠しのようだった。

続いて雫は、桜を見る。

「桜ちゃん」

「はい——」

桜は純真な眼でじっと見つめてくる。雫は赤面する。

「あの……有難うね。本当に、私に付いていいの？ 色々裏切ることになっちゃうし、お城だって、おかしかった訳じゃないって判ったわけだし。それなら……」

「御剣様。失礼ながら——見くびらないで下さいませぬか」

はつきりとした口調でこう返され、思わず雫は口を噤んだ。

「私もくのいちの端くれ。相応の覚悟がなければ、あのようなことは申しません。そして、一度申したことは翻しません。それが誠の志を見せる唯一つの道。立てた誓いは、永久に変わりませぬ。あと——將軍様云云という下りは、ただの言い訳に御座います」

そう云うと、桜は雫の着物の裾をそと取り、囁いた。

「——桜は御劍様に、付いていきとう御座います」

そのいじらしい振舞に動じた雫は、耳まで真っ赤に染めて狼狽えた。眼のやり場に困っている巴に気づくに至って、声を裏返した雫は、急いで話をずらす。我が事ながら情けないと雫も内心思う。

「あ、あの、ええと、その……岬くんも、あんな出会い方したのに、本当に有難う」

すると、美しい面持ちをした鳥上の幼子は、小さくこう応えた。

「——江戸のため」

それを聞いて、雫ははつとする。自分たちのこと、颯太のことばかり考えて、背後で炎上する町のことを、雫は危うく忘れるところだった。焼け出された人人、失われた町をこの後どうするのか。ごちゃごちゃとした曖昧な不安が、胸を掠める。

そんな雫の表情を見てか、岬はこう付け加えた。

「でも、雫も、大事」

雫は、顔を上げる。美童はほんのちよつと、判るか判らないかというくらい微笑を浮かべていた。雫はそれでほんの少し、気が楽になる。

折角なので、序でに尋ねてみた。

「颯太は？」

「——それなりに」

またツンとした無表情に戻って、岬は呟く。雫は破顔した。

最後に、威勢のよい声で巴が云った。

「火事と喧嘩は江戸の華。心配ご無用、江戸っ子を侮って貰っちゃ困るよ。

この町はすぐ蘇る——諸共、準備はよいか」

雫たちは、強く頷く。

よおし、と巴は竜虎三式改を、扉に向けて構えた。雫たちは慌てて耳を

塞ぐ。

「サア——火を噴けえッ」

巴は引金を、引いた。

天地を震わす轟音と共に——。

分厚い木の扉は、跡形もなく吹き飛んだ。

五

屋敷の中は、妖物と鬼面の武者と、妖しい光に満ちていた。

広広とした庭には、桜の古木が幾本も連なっている。そのいずれもが、膨らんだ蕾を枝に付けていた。そして中央には、それに劣らぬ立派な様式の家屋敷が建ち並んでいる。大きな篝火も燃されていた。

だが美しいものはそればかり、そこかしこをまるで主のように闊歩し蹂躪するのは、

人ならぬ者共であった。

奇怪な姿、異様な面相——否、そのようなことよりも、汚く乱れた髪、何処を見ているか判らぬ眼、ぼうと開いたままの口、だれりと力なく垂れ下がったままの腕。そうした身に湛える気が虚ろな漫ろな、そんな者たちが数えきれぬほどにぞろりぞろりと歩いている。見ているだけでも、取込まれてしまいそうだった。

一方で、禍禍しい甲冑を身につけた鬼面の武者たちは、渦を巻くような黒き暗き気を発している。一触すれば即座に斬って捨てようという、邪悪にして傲慢なる念が透けて見える。がちやりがちやりと威圧の音を立て、同じ姿をした武者たちは、我物顔で押し歩いていた。

それらが一斉に——雫の方を向いた。

思わずたじろぎそうになる。

しかし颯太は、この先にいる。

ふ、と雫は、周囲の冷たかった空気が和らぐのを感じた。

——そうだ。

——春が来るのだ。

雫は思い出し、
静かに微笑んだ。

桜の蕾が綻び開く。
春の夜風が頬を撫でる。
雫はすつ、と刀を構える。

何を気迷うことがあるう。
何を畏ることがあるう。

眼に映るが我が身の世なら、
虚言真実の違いなし。
己が宿願を確と抱きて、
ただ直向きに、
生くるのみ。

「——参る」

忽ち満開になった桜の木木に祝われて、
雫は陣風の如く、駆け出した。

武者たちは無言のまま雫に斬りかかってくる。それを雫は太刀筋に迷いなく、縦横無尽に倒していく。やはりいずれも強い。

「御剣様、後ろをッ」
何処からか聞こえた桜の叫びに素早く振り返ると、刀を振り上げた武者が、目前まで迫っていた。拙いッ、と雫は何とかそれを受けようとする。
しかし、ぱあん、という乾いた音と共に、武者はそのまま横へ吹き飛ん

でいった。

音の元を見遣れば、得意げな顔で巴が、煙を昇らせる拳銃を右手に構えていた。左手では相変わらず竜虎三式改を抱えている。

にんまりとして巴は云った。

「よおしどうだい——と思っただけど、おやおや。駄目みたいだね」

撃たれた武者は暫くその場に倒れていたが、またすぐに、ごそごそと腕や脚をねじ曲げて、奇怪な身振りで動き出した。巴は舌打ちをする。

「やっぱりその刀じゃないと倒せないようだ。とは云え、足止めくらいにはなるだろ。ほら雫、行っってッ」

「はいッ」

雫は応えながら、そうして再び襲い掛かってきた武者を斬る。すると、斬られた武者はあの時の入道と同じように、黒い煙を上げて消えてしまう。

一方でぐおう、と云う恐ろしげな鳴き声を上げて妖怪どもに跳びかかっていったのは、毛虎ケトラであった。一頭で片っ端から相手にしている。態が大きいばかりではなく、強さも兼ね備えているらしい。人の躰ほどもある頑健な腕を振り回して、踰よ踰めく妖怪どもを薙あぎ倒し弾き飛ばしていった。

雫は更に、屋敷の奥へと向かう。背後から再び、耳を劈く爆音が聞こえてきた。巴がまた大砲おおつを撃ったようである。

すると——。

突然、目の前にすたり、と忍装束しのの桜が飛び降りてきて、雫は仰天した。どうも屋根の上にはいたらしい。

「——ッ、桜ちゃん。吃驚びっくりした。どうかしたの」

「はい、周りの蔵や建物を一通り見て廻って参りましたが、東雲様も、浄瑠璃姫もおりません。そうなると恐らくは、あの正面の——」

膝をついた桜は、手で其の方を示す。

其処にあるのは、最も大きな屋敷、寢所と思しき処であった。

灯り一つなく、静まりかえっている。

「有難う、桜ちゃ——否いや。ご苦労であったな、桜」

「はいッ」

敢えてそう云ってやると、心の底から嬉しそうに、黒装束の美しき少女は笑んだ。

その時。

「ぎやあああ」

空から、酷く厭な鳴き声でした。

二人が見上げると、其処に飛んでいたのは老人のような頭をした黒い鳥だった。口からゆらゆらと、青い色をした火を噴いている。その炎もどこか力なく、それでありながら見た者の気を取り込むような、ぼんやりと不快な揺らめき方をしていた。

「ぎやあああッ」

再び鳴くと、その怪鳥は雫たちに向けて襲いかかってきた。

雫も急いで刀を向ける。桜も、咄嗟に胸元から取り出した手裏剣を構えた。

ところが――。

「ぎやあッ」

他方から別の大きな鳥が凄まじい勢いで飛んでくると、その怪鳥の腹に真っ直ぐぶつかった。怪鳥は弾き飛ばされて、傍らに建っていた蔵の屋根へ轟音と共に突っ込む。粉粉になった瓦の中で、怪鳥は動かなくなった。

そして、その現れた大鳥の背から、ひよいと岬が顔を出した。

美童は雫に向かって、初めて聴く大声で云った。

「行けッ」

雫と桜は頷く。

後のことは皆に任せ、二人は正面の屋敷へと、一心に走り出した。

二人は走る。闇の中をただ、走る。

走る。

すると――。

闇の中から、不意に声がした。

『失われてしまう――』

雫は眉を顰め、辺りを窺った。不思議そうに桜が問う。

「どうなさったのですか、御剣様」

「いや、今——」

『忘れられてしまう——』

それは、老人の声であった。

聞き憶えない、その不可思議な声の主の姿は、何処にも見当たらない。かと云って、妖怪あやかしが雫たちを惑わせようとしているようにも思えない。桜にも、聞こえていないようだった。声音も不快なものではない。

雫にはむしろ、淡く、切なく感じられる声だった。

哀しげなその老人の声は、誰に聞かせるようでもなく、呟き続けた。

『——そんなものに、価値はあるのだろうか』

それを聞いて——走りながら、雫は俯いた。

やがて二人は、最奥にあるその豪華な屋敷の前へと辿り着いた。長い廊下とずらり並んだ障子だけが、雫の立つ場所からは見える。静かな屋敷は、何人をも寄せ付けぬ重い気を湛え、時折吹く風に乗って飛んでくる桜の花びらだけが、淋しげな色彩を添える。

老人の声は、何時の間にか聞こえなくなっていた。

「——来たか、劍客」

替わって響いたのは、くぐもった女の声であった。

雫は再び、剣を構える。桜も苦内を手に握った。

雫は、声を上げる。

「何処だッ」

「云うたじやろうが。我は何処にもおらずして何処にでもおる。そなたの内にも在り、決して消えることはない。ならば在所を問うは無駄なこと」

「詭弁だ」

「詭弁に非ず。この世に人の在る限り、邪よこしまなる鬼ものは失われることはない。移ろわずして永久に生きる。我は不滅。それに勝とうなど愚かも愚か」

「もういい。出て来いッ」

もう一度、雫は叫んだ。
ふん、とせせら笑う音が辺りに響く。

「よかるう」

正面の障子の向こうに、薄い影が揺らいだ。

血肉がぶくぶくと湧き出でるように、影が大きく広がっていく。

そうして、その障子を押し倒して現れたのは――。

「――我は邪よこしまそのものなり」

最早人の形を失い、姫の着物を破いて黒黒とした肉塊をはみ出させた、この上なく醜悪な――化物だった。

「浄瑠璃姫の心の虚は、我の凝った魅まじまで日に日に満たされ――」

軀中に口がある。

軀中に眼がある。

数えきれぬそれらがぎよるぎよると何かを求めるように蠢いて、腐れ爛れた声で、雫に話しかける。

「――やがて人を辞め、邪なる鬼になった」

頭と思しき辺りから生えた薄汚い髪が、板張りの廊下にべたりと付くほど長く伸び、意志を持つかのように這い回り、のたくっていた。

雫は感じた。

これは、妖怪あやかしですらない。

ただ、ひたすらに――厭いやな物だった。

恍惚とした眼で、その厭いやな物は呟いた。

「幸いなるかな」

突然、桜が動いた。前触れなく走り出し、廊下への段を素早く駆け上る。

少女は苦内を振り上げて、その化物に投げつけた。

「東雲様を返せッ」

苦内はそのまま、化物の頭の真ん中を直撃する。相手は避けるでもなく、黒光りする武器は、深深と正面から突き刺さった。

しかし――。

刺さっただけだった。

「桜ちゃん、危ないッ」

何の痛みも感じなかったらしい化物は、無数の眼を桜の方へ向けると、

億劫そうに腕を伸ばす。青ざめながら、桜は後ろへ退いていく。

だが、それと同時に伸びていた髪が、桜の脚に固く巻き付いた。

「なっ——」

そのまま桜は、逆さに吊り下げられた。

ぼそぼそぼそと躰中の口が、疎ましい云い振りで語り続ける。

「我は死なぬ。邪執は消えぬ。この世は須く邪なり。しからば何故世を救わねばならぬ。移ろい変わり失われ、ただ残るのは邪のみ。斯様なものに、何故情けをかける。何故期待を抱く」

「このッ」

雫は叢雲を手に廊下へと駆け上がり、桜を吊る髪に斬りかかった。利刃がそのごわついた太い毛の束に、がっしと食い込む。

だが、斬れない。

何度振り下ろしても、斬れなかった。

「この、このッ、このおッ」

「邪念断ち切れず」

そう云うと、化物は無数の口でげたげたと嗤った。

それから、空いた巨大な毛むくじやらの手を握り拳にすると、化物は雫に向かって振り下ろす。すんでのところで雫は避けた。拳は廊下の床板をへし折り突き破って、大きな穴を開けた。

桜に巻き付く髪は増えに増え、躰をきつく締め付けている。

「がっ——くっ」

苦しむ桜の音が、雫の元にも届いた。

怒りに身を震わせた雫は、ただ闇雲に斬りかかり、化物の腕に叢雲を振り下ろし、脚に振り下ろし、胴体に振り下ろす。

しかし、斬れなかった。

醜い肉の塊はいくら斬っても、斬れなかった。

「何故——」

妖物を斬るための刀と信じていた、叢雲が効かぬ。

息が上がるほど繰り返し斬りつけた挙げ句、窮して困惑する雫を見て、化物は歪み澱んだ躰を喜びに揺らした。

「己が刀に疑念を抱けば、迷いを知らぬ強き邪の物に、貴様如きが勝つ道

理なし」

あははははははははははははははははははははははははは。

全ての口が、口が口が口が口が口が口が口が。

嘲笑い続けた。

——どういうことだ。

気を落着かせ、雫は考える。

——妖物を斬れるはずの叢雲で、この化物は斬れない。
と云うことは。

——これは、妖物ではない。

——偽物。

目の前で囓う物を見据えながら、雫はそう、考えた。

そして、思い出す。

宿の部屋の四隅に在った雛人形が、恐らくは浄瑠璃姫が願ったときに、
依代よしろとなって血肉をぶくぶくと湧き出させ、鬼になった。

すると——。

ふっ、と雫は、笑みを浮かべる。

化物はそれに気づくと高笑いを止め、問うた。

「なんじゃ」

雫は応えず、並んだ障子を左右に見遣る。

——一番隅の障子には。

ぼんやりと小さな、人の影が映っていた。

此方に背を向けた、何処か見覚えのある、矮小な着物姿の女の形をした、
影だった。

——成程。

全てを察した雫は、刀を其方へ向けて高く構える。

「たとい邪なる鬼も、そのものには勝てずとも——」

雫は叢雲を、その影へ向けて全力で投じた。

「——その邪なる念持つ人は、ただの小さき、弱き人間なり」

世を救うに非ず。
人間を救うなり。

飛んでいった刀は、障子を破り――。

隅に隠れて化物を操る鬼姫の背中に、真っ直ぐ突き立った。

「ぎ、あああああああああああああああああッ」

「――思い、邪なし」

目の前の醜悪な肉塊は、忽ち窄み縮んで小さな紙片に戻る。絞め殺されそうになっていた桜も髪が消えるや、ばたり、と廊下に投げ出された。

遠方で絶叫した浄瑠璃姫も、そのまま障子の向こうへ前のめりに倒れる。雫はすぐに桜の身を起こすと、無事を確かめた。ほんの少しの間気を失っていたらしかったが、暫く名を呼んで身を揺さ振ると、すぐに少女は眼を開いた。

そして、雫は桜と共に、全ての元凶であった姫の元へと急ぎ駆けつけた。

「よかった――」

雫は、優しく言葉を洩らす。

姫は、元の美しい女性にょめいの姿に戻っていた。艶艶とした髪を畳の上に広げ、綺麗な着物を乱しただけで、今は気絶しているようである。刀も、姫が妖怪でなくなった途端に抜け落ちたらしく、傍らに転がっていた。

雫はそれを拾い、腰の鞆に収めた。

かちり、と心地よい音が鳴った。

「御剣様――」

桜も可愛らしい顔を綻ばせ、雫に笑いかける。

雫は静かに息をつくくと、頷き、そして微笑んだ。

「――雫ッ」

その時後ろから、そう呼びかける巴の声が聞こえた。

同時に、走ってくる毛虎ケトラののしという大きな足音、そして、空を飛んでくる鳥の大きな羽音もある。取り敢えず二人は部屋から出て、巴らを

出迎えることにした。

毛虎ケトラの背から降りた巴は、早速早口に話し出した。

「ちよつとちよつと。何か知らないけど、戦つてたら突然相手が煙上げて消えて——ああ。やったんだね」

話の途中でそうして了解した巴は、倒れた姫や辺りの様子を見て首肯すると、おめでどう、と雫に云った。毛虎も、嬉しそうに喉を鳴らしている。

そこへちよつとよく、空から巨鳥の影が落ちる。

そしていきなり目前へと、空から岬が身軽に飛び降りてきた。

すたりと降り立ち、着物に付いた汚れをぱんぱんと払うと、無口な美童は雫の顔を見上げ、それから半ば独り言のように、こう云った。

「——おめでどう」

「有難う」

雫は笑つて、岬の頭を撫でる。俯き加減にしながらも、岬は黙つて、されるがままになっていた。

そんな様をにこにこ黙つてみていた剛胆な若女将だったが、しまいにううん、と伸びをすると、肩を揺らし、雫に向かって云った。

「さあさ。そんなことよりも、雫。やらなきやならないことがあるだろう

——私たちは、もう、いいから」

使い終えた銃をその辺の草叢へ軽く投げ捨てた巴は、最後に明るいい声でこう、話を締めた。

「あの子が、待つてるよ」

三人は優しく、雫を見ている。

笑顔の雫は強く、頷いた。

三人をその場に残すと、雫は廊下への段を上り、化物が現れた処、押し倒されたままの障子の前に立った。そうして敷居を越え、屋敷の中へと一人、足を踏み入れる。

広々とした何もなく薄暗い畳敷きの部屋を、雫は一直線に横切る。

奥の煌びやかに描き込まれた襖を、そのまま両の手で左右に開く。

中は、前の間と同じくらいに広く薄暗く、やはり何も無い。四方が襖に

囲まれただけの、畳の間だった。

そして、その中央には――。

両手両足を縛られ、猿轡を嵌められた、颯太が転がされていた。

「颯太ッ」

雫は走り寄るとその縄を解き、口から布を外してやった。

「ふう」

ようやくと息を吐いた颯太は躰を起こすなり、真っ先に雫に向かってこ
う云った。

「やっぱり、来てくれたな――」

少年は笑った。

澄み切った綺麗な、邪など微塵もない眼で、雫を見返してくる。

「――待っていた」

雫は何も云えない。その眼を見ているだけで、それだけでよかった。

云うべき事、云いたい事は、数えきれないほどあった。

けれど、それでも、雫は何も云わなかった。云わずともよかった。此処
へ来たということ自体が、云いたいことを全て表していた。そう思ってい
た。

颯太の手を取り、雫は立たせてやる。

二人は少しの間、見つめ合った。

雫は、口を開こうとした。

――その時。

雫は颯太の肩越しに、向こう側の襖を見た。

僅かに開いている。

その隙間から、白い光が漏れている。

「あれは――」

雫は、颯太の手を取ったまま、

自分でも何故なのか判らぬままに、その光の方へ歩み出した。

「――行くのか」

颯太が、訊いたような気がした。

淋しげな、声だった気がした。
雫はそのまま、部屋に行く。
その光の前に立つ。
襖に手を掛けると、
雫はそっと、開いた。
その中には――。

小さな部屋の中で、小さな老人が、背を見せて座っていた。

書院造り、四畳半の小部屋である。何もない簡素な処で、小振りな壺と、文字の書かれた掛け軸が、床の間に飾られている。灯りがあるわけでもないのに、不思議と部屋は明るかった。

白髪頭で地味な色の着物を着込んだ、こぢんまりとした老人は、床に広げた紙に、せつせと何かを描いているようだった。

雫はその姿を、静かに見つめる。

何故だろう。

この人には。

何処か、見覚えがある。

そうしているうちに、雫は気づいた。

老人が描いているのは。

間違いなく、泡沫絵巻だった。

ならば、この人は。

――歌方雅楽。

雫がそう思った、その刹那。

老人は、ゆるりと振り返った。

その顔を見て――雫は息を呑んだ。

澄んだ優しい、けれど哀しく淋しい瞳。

それは、颯太の顔だった。

「颯太——」

思わず雫は、声を洩らす。

見紛うはずもない。

年老いた、颯太の顔だ。

数度瞬くと、老人は云った。

「失われてしまう——」

雫ははっとする。

あの時何処からか聞こえてきた、不思議な声だった。

「御維新だ、文明開化だと云うて、外とくつ国の文物に踏みにじられて。私の大切な江戸の物が皆、失われてしまう——」

声も確かに、颯太の声だった。

雫は後ろを見た。

手を繋いでいたはずの颯太は、

もういない。

「忘れられてしまう——」

そして再び視線を戻すと。

老人は——颯太になっていた。

「私の大好きな江戸の町が皆、忘れられてしまう——」

颯太は、呟いた。

泣き出しそうな、眼をしていた。

——ああ。

雫は、祖父の言葉を思い出す。

生来身体が弱く

そのため生涯江戸の町を出ることは叶わなかった

明治の御代を見届け

突如として雅楽はそれまで素振りも見せなかった大作を

ただただ好きな物がつらつら並べて奔放に描かれ
雅楽の好んだ物語に出てくる泡沫うたかたの如き虚言そらごとが
ごたまぜになって極彩色で描き出されて

そうだ。

雫は全てを、理解した。

だから颯太の描いたものは、命を吹き込まれたのだ。
何故ならこの世の全てが、颯太の描いたものだったのだから。

「——颯太が、雅楽だったんだね」

雫は、そう云った。

颯太は応える代わりに、云った。

「淋しいじゃないか——」

「淋しいじゃないか。哀しいじゃないか——」

「私の大好きだったものが」

「ずっとずっと大好きだった、黄表紙のお話が、読本よみほんの物語が、歌舞伎が、
浮世絵が、絵巻物が、絡繰細工が、江戸の町が」

「古き物だ、過ぎし物だと云うて」

「何もかも、なくなってしまおう」

「何もかも、消えていってしまおう——」

「みんな、みんな、私を置いて、いなくなってしまうんだ——」

泣き出しそうな眼をしたまま、颯太はただ、そう云った。

雫は、見つめることしかできない。

だから、描いたんだね。

雫は、云う。

颯太は、頷いた。

涙が、零れた。

気づけば、部屋は光に満ちている。白く眩しい光で彩られている。

見れば、二人の傍に、

桜がいる。

巴がいる。

岬がいる。

皆、淋しく優しげな眼で、二人を見つめている。

けれど、光は余りに目映くて、

次第次第に、部屋も、皆も、薄れ霞み、消えていく。

雫は、涙を流すと、

颯太を引き寄せ、抱きしめた。

二人を残して、世界は消える。

雫は固く、颯太を抱きしめる。

頬を触れ合う。

暖かい、颯太の匂いがした。

雫にはそれしか、出来なかった。

涙が止まらなかった。

淋しかったんだね。

辛かったんだね。

雫は、颯太の耳元で囁く。

颯太は何度も、頷いた。

やがて、別れの刻が来る。

二人はそつと、身を離す。
光に包まれて、颯太の姿も少しずつ、薄れていく。
二人は何も云わず、見つめ合った。
雫は何も、云えなかった。

哀しかった。

「雫」

颯太は涙を流したまま、最後に微笑んだ。

「――有難う」

雫は、数えきれないほど云いたいことがあったのに、
何も云えなくて、
目を瞑り、白く霞み消えていく颯太を、
見守ることしか出来なかった。

最後に見た颯太は、
暖かく、安らぎに満ちた顔だった。

雫は、床の上で気がついた。
美術館の床に、倒れていたようだった。
「おーい、雫。準備出来たかー？」

遠くから、祖父の声が聞こえる。

見れば自分の服も、セーラー服に戻っていた。

そばに落ちているのは、いつもの竹刀だった。

目の前の床には、台から転がり落ちたらしい、泡沫絵巻が広がっていた。
頬に触れる、床の感触が冷たい。

涙が、止まらなかった。

